

AKITA Biz Forest

あきたBizフォレスト TOPインタビュー

TOP INTERVIEW

放送作家、演芸作家、演芸プロデューサー、作詞家、コメンテーター
元祖爆笑王 氏

本名 高橋裕幸 1964年11月4日秋田県能代市生まれ。秋田南高校時代は吹奏楽部に所属し、大学時代は落語研究会に所属、2年次に放送作家高田文夫氏に出会い師事、卒業と同時に数々のテレビ・ラジオ番組の構成、26歳で初の全国ゴールデン番組「ウッチャンナンチャンのやるならやらねば」を構成後、「笑っていいとも!」「初詣!爆笑ヒットパレード」「新春かくし芸大会」「FNS27時間テレビ」「めちゃめちやイケてるッ!」「爆笑レッドカーペット」「オールナイトニッポン」など、テレビ・ラジオのバラエティ番組のレギュラー番組や特番を多数担当。秋田でお笑いライブや県主催のイベントもプロデュース。「あきたビジネスコンテスト」の審査員も務めている。「3秒で場をつかむ技術」「漫才入門」「コント入門」などの著書を出版。秋田県PRメディアプロデューサーや秋田市観光PRアドバイザー、「これが秋田だ!食と芸能大祭典」総合プロデューサーとしても活躍中。

常に人と違うこと違う場所、今までにないを探究する

元爆さんとは、コロナに負けないようにエンターテインメント関連のみなさんからのメッセージ動画「Brave Heart秋田」を一緒に作ったご縁があります。大変お世話になりました。

元爆 こちらこそ。少し懐かしいですね。でもあれは本当にやってよかったですね。★ぜひYouTube「Brave Heart秋田」でご検索ください。

工藤 あらためまして、元爆さんのご経歴を教えてください。

元爆 生まれは能代で、その後親の転勤で秋田市の高清水小学校に入学卒業し、再度親の転勤で五城目第一中学校に通いました。高校受験は悩みましたが吹奏楽がやりたくて秋田南高校に進学しました。その後どんどんテレビの世界への憧れが強くなり、いつしか地元の放送局に就職し「秋田で番組をつくり放送する」ことを夢見るようになっていました。まずは地元放送局への就職を考え、日本大学芸術学部放送学科を第一志望で受験しましたが、結果的に同大学映画学科に合格しました。決して安くない授業料だったのですが、絶対にテレビ業界で働く!と何とか父親を説得し入学しました。映画学科の授業は日程が比較的緩く、こっそり放送学科の授業も受けていました!よくお前何学科?と聞かれ、放送映画学科とか答えていたのが懐かしいです。

工藤 勝手に別の授業を受けるなんてスティープジョブズみたいですね。笑。ちなみに放送作家という職業については詳しく知らない人もいますかと思うので、あらためて

どんなお仕事か簡単に教えて下さい。

元爆 放送作家は主にテレビの台本を書くことや会議に出て企画書を出すのが仕事!例えば青島幸男さんとか大橋巨泉さん、秋元康さんも放送作家ですね。放送作家は資格がないため呼ばれた時点で放送作家です。笑

工藤 私もラジオコーナーの構成を考えたりもしますので呼んでもらえるかも!笑。ところで元爆さんがテレビ業界に進みたいと思われたきっかけなどはあったのでしょうか?

元爆 中学生のときに五城目にドリフターズが来て、それをみたこと!です。たまたま親が商店街のくじで観覧チケットを当て、友人と二人で観に行きました。とにかくそれがめちゃくちゃ面白くて本当に大笑いしました。こんな世界もあるんだな〜と、「人を楽しませる」という感覚が、自分のテンションも上がり気分も良くなることを知り、テレビの中で働きたいと思い、いつしか「秋田で番組をつくり放送する」という夢になりました。

工藤 生ドリフターズ!影響力も破壊力も高そうですね。大学生活はいかがでしたか?

元爆 今思えば、素晴らしい出会いと経験に満ち溢れていたと思います。まずは大学1年の時に落語研究会の「立川志らく」とさんに出会います!志らくさんから研究会に勧誘され、何となく勢いで参加しましたが、とにかくずっと正座するので、とても辛くて日々やめたいとも思っていました。ある日なぜか志らくさんと「ガンジー」という映画を一緒に、我慢することの大切さを諭され、、、苦笑。いつのまにか落語を必死に練習していました。そんな

な時、落語研究会OBでもあり、後に師匠となる放送作家の高田文夫さんから「地方のテレビ局ではそう簡単に番組なんて作れないよ。そもそも配属だって営業や総務になるかもしれない。むしろお前の夢を本当に叶えたいなら、安定はしないかもしれないけど、フリーで放送作家として活動し、東京のキー局に認めてもらえれば、結果秋田でその番組が放送され夢が叶うのでは…」とアドバイスをいただきます。自分では思いつきもしませんでした。それを聞いたのは、2年次の落語研究会の合宿の時であり、その日の夜に高田さんと意気投合、高田さんにバイトがてら運転手やカバン持ちをやらなかと誘っていただきすぐに弟子入りしました。大学3年の時には、田中義剛さんのオールナイトニッポンをたびたび担当させていただくなどしながら、大学生活と放送作家見習いの2足の草鞋生活、今風に格好よく言えば2刀流ですか。そして大学4年。父親には地元の放送局就職を目指している建前でしたが、この頃は既に放送作家の道を目指していたので少し困りました。きっと放送作家になりたいと言っても伝わらないだろうと思い、とりあえず卒業後は株式会社高田文夫事務所に就職しました。とにかく一生懸命番組作りに励んでいました。そして26歳の時に担当したウッチャンナンチャンの番組がブレイクし、番組ロールで名前となぜか出身県も掲載「構成 高橋裕幸(秋田)」と放送されていたことで、親せきや家族や友人に放送作家としての自分を知ってもらえました。その後地元のテレビ局から「爆笑一番」という番

あきたBIZフォレストTOPインタビューは、秋田の起業家と企業環境を応援することを宣言いただいた100名以上の経営者の皆様を中心に、起業家に役立つ話題と起業家へのメッセージを対談形式でまとめたものです。

組制作を任せていただきました。それは同時に「秋田で番組をつくり放送する」という夢がかなった瞬間でもありました。

工藤 凄いですね。ドリフターズからはじまった夢への情熱と出会いをチャンスにできた元爆さんの嗅覚が、シャイニングロードを切り開いたわけですね。素晴らしいです。時に今、若者のテレビ離れも進んでいます。そういった意味では業界も大きく変化し、或いは変化しなければならないと思います。中田敦彦さんみたいに、芸人からYouTuberに転身される方もいます。ちなみに元爆さんは今後どこに向かって歩こうとお考えですか?

元爆 とにかく常に「人と違う場所」を探して歩きたいとは思っています。過去には国、県のイベント「海フェスタおが」や「国民文化祭」のお仕事などは放送作家としてではなく、秋田県のメディアプロデューサーとして活動しています。放送作家に限らないとは思いますが、他と同じような…ではやはり厳しいと思っています。僕の生まれは秋田ですし、まずは秋田にフォーカスした活動を心がけています。

工藤 最近レッドオーシャンやブルーオーシャンという言葉をよく耳にしますが、元爆さんはずっと昔からその視点があり、常にブルーオーシャン或いはホワイトオーシャンを探しながら歩いていたのですね。ちなみに他と違うフィールドを探すコツはありますか?

元爆 一般的にはよくはわかりませんが、僕の場合は放送作家ですので、今までにない番

組って何だろうを、いつも単純に考え続けています。ちなみに僕は温故知新という言葉が好きで、秋田の昔のことを勉強したり思い出したりして、色んなところを見たり歩いたりして、アイデアを考えたりすることもよくあります。

工藤 なるほど。私も好きな言葉です。ところで元爆さんがビジネスをしていく中で大切にしていることなどはありますか?

元爆 中途半端にしない。といえますか、やるなら最後までやる。ということでしょうか?めっちゃイケという番組を22年間もやっていくと、アイデアが活性化しにくいときもあります。でも徹夜してでも最後までやるしかない。当たり前ですが、最後まで仕上げなければ番組も放送されず、多くの人に迷惑が掛かります。まずはスタートしたら何が何でもゴールまでいく。やめるくらいなら最初からやらない方がまだいいと思います。意外にそんな当たり前のことができない人たちも多いのかなあと思うことがあります。

工藤 非常によくわかります。ビジネスにおいて「約束を守る」ことは「基本のキ」ですね。たまに耳にするお話かもしれません。

本日は貴重なお時間とお話を本当に有難う御財増した。

インタビュー

合同会社ジェグルス(共同事業体ジェイワン) アントレプレナーコンシェルジュ 工藤 実

ライター ノースアジア大学2年 樋渡 海斗

企画 共同事業体ジェイワン(秋田市ビジネススタートアップ支援事業)



※撮影のために一時的にマスクを外しています。